

一ノ木戸小学校 学校だより 令和3年7月9日第6号



ひびき

一ノ木戸ポプラ学園

めざす子ども像

◆豊かなかわりを
求めて
自分の可能性を拓く
子ども

自助（・共助・公助）～出水期を迎えて～

校長 渡邊 芳久

お亡くなりになった方9人、重傷者1人、軽傷者79人。全壊1棟、半壊5281棟、一部損壊1棟、床上浸水515棟、床下浸水1649棟。被害総額約289億円の被害が出た、7.13水害。あれから17年の年月が経ちました。

当時生まれた方々は、現在、高校生世代。今の小学生はもちろん、中学生も平成16年の水害時には生まれていません。

また、保護者の皆様の中には、当時は小・中・高校生世代だったという方々も少ないのでは、と思います。記憶が薄れてきている方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、あの水害を経験した者たちは、その経験を後世に伝えていくことが必要であり、社会で生きる者にとっては義務と言ってもいいのかもしれないと思います。

学校では、今年度、6月30日を防災教育の日とし、全校朝会では7.13水害を中心にした講話を、午後には火災を想定した避難訓練を実施しました。

水害に関する講話の講師は、三条市内在住の当校の職員です。予期せぬ突然の五十嵐川破堤による出水により、幼い我が子を連れて、必死に安全な場所を求めて避難した様子を、当時の細やかな、そして正直な心情も含めて丁寧に語ってもらいました。全校の子どもたちは、各教室のリモート画面を食い入るように見つめ、その話を傾聴していたように思います。私自身も、当時、小学生だった娘と2人きりで、自宅に帰らぬ他の家族の安否を気にしながら、刈谷田川破堤による出水で水に囲まれた自宅2階で眠れぬ夜を過ごしたこと。向かいの近所の方々と窓越しに一晩中声を掛け合いながら、互いに励まし続けたこと。自衛隊の方々のヘリコプターやボートを使った救助作業を目の当たりにしたことなどを思い出しながら聴いていました。

午後の避難訓練は、出火想定場所を調理場として実施しました。これまでは、地域交流室の調理施設からの出火を想定し、出火場所から離れている中学校グラウンドに避難していました。しかし、今回は出火想定場所のすぐ近くを通ることになるので、グラウンドとは反対側の体育館脇インターロッキングに避難しました。

毎回、同じ経路で同じ場所に避難するのではなく、災害状況を変え、その状況にあった避難ができるようにと考えた結果の訓練です。

10年近く前、市内のある学校の防災教育授業での出来事を聞いたことがあります。三条市のハザードマップを使った授業だったそうです。そのハザードマップを見ながら自分の避難行動を考えていた生徒は、「信濃川のどこが破堤したときのマップですか？」という趣旨の質問をしたそうです。それに対し、授業者や講師の方は答えられなかったそうです。そして、その生徒の質問はとても素晴らしく、ハザードマップも、一つの想定に過ぎないものであること。想定外のことが起きるのが災害であり、そのために学び、考え続けることが大切であることなどを生徒たちと確認し合ったそうです。

様々な災害は、子どもたちが大人と一緒に起きるとは限りません。年に何回かは、各ご家庭で、万一の場合の避難行動や避難場所等を確認し合うなど、自助（自分の命や財産は自分で守る）・共助・公助という、防災・減災の基本を学び合うことが大切だと思います。（裏面に写真等あり）